川西まちづくり委員会　子育て教育文化部会　地域文化財フィールドワークレポート

信州上田 川西紀行

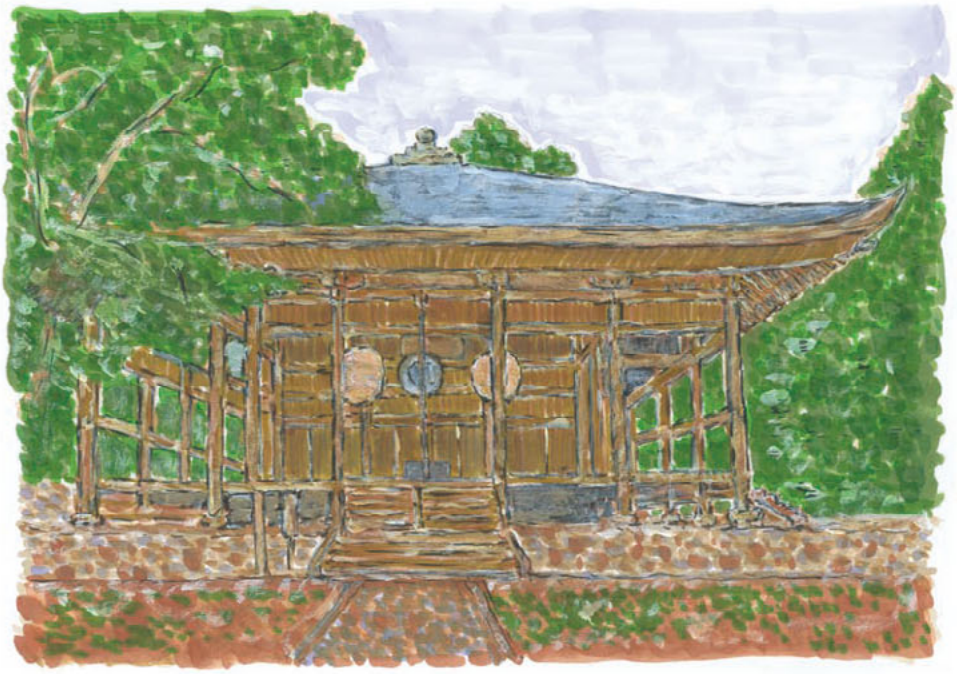
～小泉大日堂（小泉）～

川西まちづくり委員会事務局
〒386-1106 上田市小泉863-1
川西地域自治センター内
電話080-5827-9724
E-mail kawamati@ued.janis.or.jp

第２号
令和５年３月発行

県内唯一の中世室町時代の大規模仏堂
小泉大日堂を訪ねて

川西まちづくり委員会 子育て教育文化部会は
令和四年十月二十三日　地域文化財フィールドワークを行いました



「大日堂」　柏原敬一

はじめに

子育て教育文化部会
部会長　堀内義信（浦野南）

私は室賀の山の中を歩いている。もう少し先には崩れかかった石垣が見える。なんて小説の一説に出てきそうな気持になった。それは昨年度の皆様が作成された第一号の川西紀行を読ませて頂いた想いでした。それに携わった皆様には申し訳ないが、この部会の最初の会合で配布されて初めて読ませていただいた。そこで川西紀行を引き継がなければならないという、強い気持ちになった、本年度の活動を決める会合では、私の半ば強引なかたちで今年も地域の文化財フィールドワークに決定した。場所の検討では、理由は皆違えど、小泉大日堂と隣接の博物館に全員一致で決定した。

今回は大日堂に詳しい増田氏にご参加をお願いして、今から十一年前の平成二十三年の御開帳の話や幼少期の思い出話などお伺いすることができまして、当時の光景が目に浮かんでワクワクさせていただきました。

実は、遠い過去に一度大日堂と博物館に行ったことがあるんじゃないかなとずーっと思っていた。当日、杉並木から博物館に進んでシナノイルカの化石を見た瞬間、それがなんとなくから確信に変わった。私が小さいころ化石に興味があったのは、この化石をみてからだと。何十年もの間、大日堂の看板を見るたびに何かもどかしさを感じていた。お陰様でやっとその気持ちから解放された。

いつからか化石の興味は薄れたが、もっと頭の出来がよかったら考古学の学者にでもなっていたのかな…、そんなことはどうでも良いが地域の子供にこの貴重な文化財に関心を示してもらいそれを継承していくこと、その道しるべになるような、報告ができればいいなと思った。

あと十九年後にはまた御開帳が華々しくそして厳かに開催されるように。

写真前列中央が案内してくださった増田資彦さん

P1 部会長メッセージ
P2 小泉大日堂とお開帳
P4 小泉大日堂
　フィールドワークを行って

マップ
いってみよう
小泉大日堂
こどもページ
民　話
大日堂のくも

イラスト　絵師・柏原　敬一

小泉大日堂お開帳開催について

文・増田資彦
（第十回小泉大日堂お開帳実行委員長）

第十回お開帳開催に先立ち、小泉自治会内で配布されたものです

この度、小泉大日堂は、平成二十三年四月十七日（日）に第十回目のお開帳を開催すべく現在計画準備中です。

当、小泉大日堂は今を去る千百有余年の昔、坂之上田村麻呂が征夷大将軍として東征のさい、期願成就を報謝し、建立されたのが現在の大日堂で、【伽藍、朱門、一二房、仁王門と共に大日如来、阿弥陀如来、千手観音、弘法大師像の他に熊野権現宮が寄進された。そして将軍より別当高仙寺に寺領三千石と裏菊の紋の使用が許された】当初は瓦葺きであった。後に、茅葺きから銅板葺きにかわった。

その後、武田信玄が信濃の国制覇を目指し方々で戦をしたが、村上義清との上田原合戦において大日堂をのこし、別当高仙寺、一二房、仁王門、高仙寺庫裡他建物、書類はすべて焼失の憂き目にあっています。

創建は、推古天皇の時代（六世紀末）に小泉天白山が日夜震動雷電が続いたため、人々はおどろき集まって相談の末、山神をまつって御願いしようと七昼夜通い祈った。七日目の夜白髪の翁が顕れて、この山中の岩窟に霊験あらたかなるものがあるといってそのまま消えた。村の長がおつげにしたがい岩窟を掘ろうといい、そのまま大勢山中に入り堀崩し見れば老翁の教えのとおり身丈壱弐寸のものが顕れ、燦然と輝き夜の闇を照らした。村民は随喜拝礼しすぐに小堂をたてて安置し葬れば【存在を世間から覆い隠す】震動忽ちやんだ。その話が方々に拡がり大勢の人々が参拝した。と大日堂縁起碑文に記されています。

黒門

小泉大日堂

大法会

練供養

【縁起碑文は、境内石畳左側の大きな石塔に刻まれています。黒門には、亡者の審判を行う裁判官的な役目の十王と、亡者の衣服を剥ぐ役の奪衣婆の建物がありますが石造りの物はあまり見ることがありません。前に出てきた仁王門ですが、現在の黒門の所にあったともいわれ又、日向地区内に阿弥陀堂と言われる地名がありますが、そこに阿弥陀様を祀ったお堂があったとも言われています。この地域には、寺の付いた小字名が多く残ってもいますし又小泉小太郎物語・大日堂の大蜘蛛の民話があります】

お開帳には、神楽、二十五菩薩来迎会、練供養（稚児行列）、御詠歌、大法会、ささら踊りが奉納されますが、同時に秘仏も公開【扉を明ける】されます。【本尊は例祭の時のみ大日堂に扉は開けず鎮座しますが、お開帳の時は扉を開けます】

回向柱【回向…修めた功徳を悟りのため又他者の利益のために振り向けること】は前回までは大日堂前と黒門をくぐったところに二本建て、紅白に縁綱にて仏の手と繋ぎました。お開帳はこのような祭事と共に、建物、仏具の補修と共に周囲の整備も行ってきました。

町小泉　神楽奉納

下室賀　ささら踊り

二十五菩薩来迎会は簡単に言いますと佛を念じる一切【多くの人々】の衆生【生きている者すべて】を大慈大悲【佛の大きな慈愛】の阿弥陀如来が西方浄土より出御して行者を迎い浄土に引導する儀式です。【念仏の信者が佛の力で極楽往生する】

二十五菩薩は

不動明王　光明菩薩
金蔵菩薩　宝蔵菩薩
徳蔵菩薩　虚空蔵菩薩
宝自在菩薩　普賢菩薩
獅子吼菩薩　地蔵菩薩
秀宝菩薩　華厳菩薩
薬上菩薩
観音菩薩
阿弥陀如来
薬王菩薩
勢至菩薩
日照菩薩
月光菩薩
三昧菩薩
大威徳菩薩
白象菩薩
大自在菩薩
定自在菩薩
毘沙門天

の菩薩より構成されております。

お開帳は今までに九回開催されています。

八回までの二十五菩薩は、小泉地区の二十歳から二十五歳までの青年で両親が健在し、五体完全の人を二十余人選定して受戒行為を行い練業一週間【主堂に泊り込み】日夜沐浴斎戒して後、二十五菩薩に扮しました。九回からは小諸市平原二十五菩薩来迎会保存会の皆様にお願いしております。

下室賀　三頭獅子

二十五菩薩来迎会

お開帳で賑わう境内と回向柱

写真・資料　増田資彦（小泉）・小泉大日堂保存会

回	お開帳開催年	その頃の主なできごと
一回	天和二年（一六八二）	天和八年（一六八八）真田信之が松代へ移封、仙石忠政が上田城主になった
二回	寛保二年（一七四二）	松平氏は上田城主で支配していた【千曲川大洪水発生】
三回	享和二年（一八〇二）	松平氏が支配
四回	嘉永一年（一八四八）	松平氏が支配 乱暴な誤った修理により創建当初と異なった姿になる【天保飢饉発生】
五回	明治七年（一八七四）	日向、町、山口、上下半過合併して小泉村誕生【明治二年　電信電話会社発足】【明治四年　郵便事業始まる】
六回	明治二二年（一八八九）	帝国憲法発布 福田村、吉田村、小泉村三村合併して泉田村誕生【明治二一年　信越線開通】【明治二三年　上田橋開通】
七回	大正一〇年（一九二一）	【大正九年　上田電鉄青木線開通】
八回	昭和二六年（一九五一）	六月　雹災害、麦桑（養蚕）に大被害 講和条約締結 屋根（茅）葺き替え、冠木門（黒門）建替え 博物館を建てシナノイルカの化石他を収納
九回	昭和五六年（一九八一）	前年の復元大修理によりほぼ原形に復す 本堂屋根銅板に葺き替え、冠木門（黒門）補修
十回	平成二三年（二〇一一）実施予定	本堂周囲石垣修理 本堂壁補修、仏具修理 冠木門（黒門）、十王堂、奪衣婆堂補修 弘法大師堂、観音堂補修

二十五菩薩来迎会

「お祭り女子」　柏原敬一

大日堂のくも

むかしむかしの話。

小泉の里、大日堂の近くにひとりの若者が住んでおった。名前のことはようわからん。そんだで、若者っつうことで語るけんど、聞いておくれ。

働きもんだが、若者の暮らしはかすかす。少し暮らし向きがよくなったかと思うと、父やんが死んだ。母やんが死んだ。ふたつ葬式出して、銭つかって、すってんてんになった。ひとりになって、またせっせと働いて、なんとか目先が見えたと思ったら、稲にイモチが出るわ、畑に青虫がわくわ、つうぐあいだ。

「兄いんとこは、貧乏百姓のせつなさ絵にかいたみてえだ」

「次から次へとなあ。なにひとつ悪いことするというでねえになあ」

「ふんとにおやげねえ話だわさ」

「神ほとけも、ちったあ兄いのこと気にかけてくれてもよさそうなもんだでやなあ」

人が寄って、若者の話が出るときは、いつもそんなふうであったと。

ある年の暮、ぼつぼつ炬燵もはずそうかという生暖かい夜。若者はうたた寝をしておったが、なんともいえねえぶきみな気配に、はっと目をさました。

見ると、いっぴきのくもが、天井から銀色の糸を光らせ、若者の顔のま近に降りていた。飛び起きた若者は、

「夜のくもは、親に似ていても殺せ」

といっていた母やんのことばを思い出して、たたっ殺そうとしたが、くもはまだ小さく、ひとり暮らしの若者は、なんだかかわいそうになって、殺すのをやめた。するとくもは、糸をはい上がってあっという間に天井に消えた。

夏になって、朝早くから小泉の日向山に入った若者は、下枝払いに精出して、でっかい束をいくつか作った。

「昼めし食ったらひと休みして、束しょいおろすべえ」

若者は手近な切り株に腰をおろした。昼めしをくい、ちょっと横になった。天気はいいし、風は気持ちがいい。若者はいいぐあいに寝込んじまった。

すると、そこへ一匹のくもが出てきて、寝ている若者の足の親ゆびに尻を押しつけて糸をまきつけると、そばの草むらん中へ消えた。消えたと思うとすぐまた出てきて、ゆびに糸をまきつける。

それをくり返しくり返しするうち、糸はぐんぐん太くなって、じきにひもほどになってな、若者の足のゆびをがんと縛りつけたと。

ちょうどその時だ。同じ日向山に入っていた村の衆がひとり、山をおりてきて、その様子を見つけたっつうわけだ。

「こりゃあおかしい。ただごとじゃあねえ」

そう叫んだ村の衆はな、若者をたたき起こすと、ふたりしてくもの糸を切ろうとした。ところがねばねばしたくもの糸は、ちょっとやそっとのことで切れるもんじゃあねえ。鎌やなたの刃、はねかえすようだ。

必死で切りはなして、くもの糸をそばのでっかいつつじの木の幹に縛りつけ、ほっとしたとたん、どうだ。そのつつじの太てえ株がぐらぐらとゆれはじめ、くもの糸に引っぱられてばりばり音を立て根こそぎ引っこ抜かれた。そして凧みてえに宙に舞いあがると、ぐんぐん山をくだっていく。

「ひえー……」

おったまげて腰を抜かさんばかりのふたりは、気を取りなおして、宙舞って山ぁくだっていくつつじの木、夢中で追いかけた。

なんと、つつじの木は大日堂の天井のなかへすい込まれていった。

ふたりの話を聞いた村中ははちの巣突っついたようにわらわら大騒ぎになった。

「おっそろしいこんだ。大日堂の天井裏にくもの化けものいるとは……」

「なんとしても退治せにゃあ」

「そうだ、そうだ。また兄いの次にだれか狙われる」

村の男衆は、鍬だの棍棒だのそれぞれに得物持って集まったが、

「じゃあ」

と先立つ者はいない。

「ここんとこはやっぱお武家さまに先頭きってもらって」

というわけで、郡役所の侍を先頭に押し立てて大日堂につくと、こわごわ天井をはがしはじめた。

すると、いたいた。針みたいな毛をまっ黒な体にむじゃらむじゃら生やした大ぐもが、尻から銀色の糸吹き出して向かってきた。

大ぐもと村の衆とのはげしい戦いは長いこと続いたが、侍を先頭にした村の男衆あげての必死の力は、とうとう大ぐもをやっつけた。

こうして、大日堂に巣くっていた化け物の大ぐもは退治された。

その後二度と化け物が住みつかぬようにと、大日堂は天井を張らないまんまにすることになったんだと。

若者のところは、それからどういうわけかしらねえけれど、だんだん暮らし向きがよくなっていったと。嫁ももらって、子も出来て幸せになったんだと。

おしまい。

「そのまんま語れる上田の民話30
塩田平民話研究会編著」より

（民話は天井がないと結ばれていますが、
現在の大日堂は内陣のみ天井があります）

小泉大日堂フィールドワークを行って

～子育て教育文化部会委員の想い～

安斉亜紀子（越戸）

参道入口にある黒門の横（大日堂に向かって左側）に数体の石像があります。その中央に怖い顔をしたおばあさんの石像があります。そのおばあさんは奪衣婆（だつえば）と言い、三途の川のほとりで渡し賃である六文銭を持たずにやってきた亡者（死者）の衣類をはぐ老婆といわれています。そのはぎ取った衣類は懸衣翁（けんえおう）という老爺によって、川の辺りに生えている衣領樹（えりょうじゅ）にかけられる。衣領樹にかけた亡者の衣の重さにはその者の生前の業（生きている間の行い）が現れ、その枝のしなり具合で死者の罪業が判ることになっており、死後の処遇を決めるとされています。

三途の川とは幽明界（あの世）の境界であり、急流・中流・緩流の三か所の渡る場所があり、死者の生前の行いによって渡る場所が違うようになる…そうです。

三途の川を渡る際には皆さん気をつけましょうね。

六文銭と生きてる間に良い行いを忘れずに！

小野沢忠美（ひばりヶ丘）

10月23日まちづくり委員会で小泉の増田さんの案内で小泉大日堂を見学に行った。黒門をくぐると右に亡者の審判を行う裁判官的な役目の十王と左に亡者の衣服を剥ぐ役の奪衣婆（だつえば）の建物があり、中にある十王と奪衣婆の石造りの物は他ではあまり見ることがないとのこと。

ここからの参道は道の両側に樹齢３００年を越える杉の大木が整然と立ち並び参拝者を迎えていた。参道を抜けると右側に高仙寺がありその裏にイルカの化石他を収納する博物館がありそれを見学した。山国の信州でイルカの化石とはおどろきである。大昔はこの地域が海の底にあったことがよく理解できた。もとの道に戻り急な階段を登ると目の前に大日堂がひっそりとたたずんでいた。案内人の増田さんによると大日堂は、30年に1回お開帳を開き、神楽他が奉納され、同時に秘仏も公開されるとのこと。大日堂のいたんで継ぎ足をした大きな柱を見ると歴史を感じた。今回の見学に参加してこの文化財が残っているのは地域住民のみなさんが長い間保存のため協力し合い守ってこられたからだと思います。

又時折静かさを求めて訪れたいと思いました。

草野美智子（藤之木）

秋晴れの10月23日、高仙寺駐車場に集合。少し肌寒いが空気が澄み、最高のフィールドワーク日和だ。幼少期、すぐ下の日向地区に住んでいたが、その時に一度きただけでそれ以来来ていない。約40年後に見る景色は当時と全く違っていた。皆で駐車場より下へくだり黒門前に立つ。３３０メートルにおよぶ杉並木の参道をゆっくりゆっくり歩いてゆく。

何ともいえない気持ちになった。樹齢３００年といわれる杉の大木がこちらをじっと見ている。心が清らかになっていく。そんな気がした。

高仙寺の駐車場を過ぎると泉田博物館がある。昭和９年に発掘されたイルカの化石（シナノイルカ）が展示されている。約１０００万年前のもので、当時はこの一帯が海であったという事だ。不思議な感覚。

そこからさらに上へ。石段を登ると小泉大日堂が出現。天文17年の武田信玄と村上義清の上田原合戦でことごとく消失したがこのお堂だけは残ったそう。屋根が四方から頂上に集まる「宝形造」とても立派である。

凛とした存在感。堂々としていて素晴らしい。今日は来れて良かった。

是非たくさんの人に訪れてもらいたい。小泉大日堂はずっとずっと昔から天白山の中腹より上田の地を見守っている。

遠山幹男（浦野南団地）

階段を登り、黒門に立つ。参道と言えば大スギ並木が整然と立ち並び、偉観を呈している。まるで異次元世界への入口の様な参道だ。（思えば黒門柱右側には奪衣婆、左側には十王が鎮座していた）

参道は大日堂の石段前までまっすぐに約三百五十メートル位続いている。参道を行くと右側に高い石積みと漆喰の塀に囲まれた高仙寺が、正面より本堂を仰げば大屋根に裏菊紋・菊紋・当寺紋が日を浴び秋空に輝いていた。（高仙寺は大日堂別当で幾度かの戦火により再三建て替えられたとのこと）

高仙寺を過ぎ参道を行くと六十段ほどの石段があり、上りきると境内に大きな正方形の建物が現れてきた、小泉大日堂だ。お堂は、平面十六、五五米四方、四方から頂上に集まる屋根。実に美しいお堂だ。（県内で一番の宝形造りのお堂）創建は推古天皇（六世紀聖徳太子の叔母）のころ、小泉天白山で日夜震動雷電が続き、村人たちが恐れて山神をまつって祈る事七日目に白髪の翁が現れ、山中に霊験あらたかなものがあると村人につげた。村人たちは大勢で掘り崩すと、身丈壱弐寸のものが現れたので小堂をたてて安置し葬れば震動がやんだとの事、その話が方々に拡がり大勢の人が参拝するようになったのが始まりのようだ。（現在の大日堂は坂上田村麻呂（七九七年）が征夷大将軍として東征のさい祈願成就を報謝して建立）又、小泉小太郎物語・大日堂の大蜘蛛の民話も興味深い。

小泉大日堂では三十年に一度お開帳を開催。お開帳には神楽・二十五菩薩・練供養（稚児行列）・御詠歌・大法会・ささら踊りが奉納され、回向柱を大日堂前と黒門をくぐった前に建て紅白縁綱で仏様の手と繋ぎ仏様のご加護を得る為、地域の人や地域外からも多くの参拝者で賑わう、お開帳祭事とのこと。

大日堂に来る前、高仙寺の裏手にある泉田博物館（シナノイルカ資料館）に足を運んだ、イルカは約一千万年前、我が国の中部地方が海底にあった事、海中には多くの生物が生息していたことを解き明かす重要な発見で、又重要な資料だと言われています。（日本列島の成り立ち）

小泉大日堂にて、日本列島の成り立ちに関係する貴重な発見と、大日堂創建と推古天皇の関わり（日本国史）、日本の統一国家形成に活躍した征夷大将軍坂上田村麻呂（東夷東征）・戦国時代の遺跡（堂裏手にある山城）その史跡を巡りながら、その時代を想像するだけでも気持ちが昂りました。

小泉大日堂のお開帳は三十年に一度と聞きお開帳時にはぜひ参拝に来れたらと思いました。

古海　淳（小泉）

まちづくり委員会の今年度のメンバーで初めて屋外に出て、私の住んでいる日向地区の「大日堂」にフィールドワークに行きました。「大日堂」は子供達と散歩をしたり、地区の行事である道祖神祭りの小屋作りに使用する杉の木を頂きに行ったりと、いつも身近な場所だと親しみを感じていましたが、フィールドワークにてたくさんの歴史や文化財があることを知り大変勉強になりました。

三十年に一回のお開帳祭りの実行委員長・増田さんから貴重な当時のお話をお聞きでき、下の娘が生まれた年に開催されたとお聞きして、参加してみたかったと思いました。

私のおすすめスポットは黒門を通り、大きな杉の木の参道並木をおすすめしたいと思います。一面杉の木が繁っています。絵に描く程素晴らしく登っていくと癒されます。途中には、「海を渡る蝶・アサギマダラ」も九月～十月半ばには見られるそうです。並木道を登り、石段を登ると「大日堂」です。本堂も歴史ある立派な造りになっており、是非お子さんと来て頂きたいと思います。

今回のフィールドワークで貴重な体験ができ、楽しい一日でした。

小泉大日堂フィールドワーク実施と「川西紀行」発行にあたり、ご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

いってみよう
こいずみだいにちどう
小泉大日堂

鰐口（わにぐち）

鰐口（わにぐち）

お堂正面に下がる鰐口。参拝に来た方が、いい音を鳴らしていたよ。

小泉大日堂

大日如来をおまつりするお堂です。室町時代後期の建築といわれています。たくさんの木々に囲まれて、澄んだ空気の中に静かに建っています。

小泉大日堂（こいずみだいにちどう）

階段は…という方はこちらから…

階段（かいだん）

階段を登れば大日堂はもうすぐ！さあ、階段は何段あるかな？

泉田博物館（いずみだはくぶつかん）

「シナノイルカ」の化石を展示。昭和9年に近くの沢で発見され、ほぼ全身が残る貴重なものだそうです。1500万年前、この辺りは海でした。クジラの化石の展示もあります。一緒に泳いでいたのかもしれませんね。

シナノイルカの化石

泉田博物館（要予約）
電話 0268-24-7255（高仙寺）
入場料 一人 100円

杉並木の横に、秋の七草「フジバカマ」が見られます。旅をする蝶「アサギマダラ」が好きな植物です。アサギマダラは、花が咲く9～10月に川西地区に飛んできます。

駐車場（ちゅうしゃじょう）

じつは…ここからのながめが最高！小泉地区、さらに遠くの独鈷山まで一望できます。

高仙寺

高仙寺（こうせんじ）

高仙寺は、大日堂の別当寺として建てられました。立派な本堂や鐘つき堂などがあります。桜や紅葉の季節はとてもきれいですよ。

参道（さんどう）

杉並木

杉並木（すぎなみき）

杉並木のこもれびは、とっても気持ちがよくて、お散歩にぴったり！樹齢300年以上の杉が130本あまり、330mほど並んでいます。この地方でこんなに大きな杉並木はとても珍しいそうです。

黒門をくぐると、長い杉並木が続く参道です。門の両側には仏像が納められた小さな建物があります。

黒門（くろもん）

黒門

亡者の審判を行う判官役、十王の像。見ると、なんだか背筋が「ピン！」となります。うそをついた人の舌を抜くという、えんま大王を探してみてください。

閻魔大王（えんまだいおう）

えんま大王

奪衣婆（だつえば）

三途の川で亡者の衣服をはぐ役の奪衣婆の像があります。はがされた衣服の重さは、その人が生きているときの罪の重さといわれます。

奪衣婆（だつえば）

マップ 原案 清水美穂／製作 子育て教育文化部会